シモマッチの校長随想

～教育は過去からの贈り物、そして未来へのメッセージ～

下町壽男　前岩手県立花巻北高等学校長

第７回
カッコ付の個

□ 若きアスリートの言葉から

平昌オリンピックでの日本人選手の活躍は素晴らしかったですね。驚いたのは、彼らは世界中に友人を持っていて、海外メディアへも流暢に対応をしていることです。真に世界で活躍するアスリートとは境界を超えた人間なのだと感心しました。逆に言うと、ボーダーレスの活動をしているからこそ、技能はより高まり、高い見識を有する選手になるのでしょう。

フィギュアスケートの羽生結弦さんは、インタビューでこんな話をしていました。

「『スケート』だけじゃなくて、こうやって『羽生結弦』として、たくさんの方々に育てていただいたことを本当に感謝しています」

また、スピードスケートの小平奈緒さんは、「金メダルをもらうことはとても名誉なことですし、うれしいんですけれど、どういう人生を生きていくかが重要だと思うので」という言葉の後、自分をバックアップしてくれている相澤病院に対して、「相澤病院は自分が本当に苦しいとき、『成績』よりも自分の『夢』を応援してくれた」と語ります。

さらりと話されたこれらの言葉が、私の胸にささりました。オリンピックアスリートは、多くの人々から支援を受け応援される存在です。そこには、彼らに対するリスペクトと同時に、一方で「結果を残すこと」への過剰な期待が見え隠れします。期待通りにメダルをとると、人々のボルテージはこれでもかというほど高まり、選手は英雄にまつりあげられます。しかし、結果を残さないと、その熱量は急速に冷めていき……。

私たちは、「アスリート」というカッコ付の個に対して恋い焦がれ、さらにそれがメディアによって増幅されていきます。そのような中で、過剰な思いのベクトルはしばしば内側に働きます。例えば「感動をありがとう」という言葉には「私を気持ちよくさせろ」というある種傲慢で強迫的で即物的なメンタリティを私は感じます。

羽生さんの言葉には、「フィギュアスケ

ーターとして」だけでなく、一人の個として多くの人が自分に向き合ってくれていることに喜びを感じていることが汲み取られます。また小平さんは「成績」を期待する周囲のプレッシャーの中で、「夢」を応援してくれる相澤病院の存在がいかに大きいかを語っています。ああ。オリンピアンたちは、競技だけではなく、「成績」「結果」に鵜の目鷹の目になる周囲の視線とも戦っているんだなあと、私は少し切ない気持ちになったのです。

「生徒」「教師」のカッコを外せるか

私は2人の言葉から、学校における生徒と教師の関係について思いを巡らせました。教師は学校現場で子どもたちを「生徒児童」というカッコ付（肩書付）の存在として眺めています。さらにいうと「『花巻北高校』の『生徒』」というように二重のカッコ付で相対しています。「勉強と部活動をしっかり」「ちゃんと挨拶を」「提出物を出しなさい」「進路を決めなさい」「スマホを教室で使うな」などといった言動を教師が行うのは、彼らを「生徒」という属性の中で見ているからです。そこには、彼らへの「期待」や、立派に育てようとする「使命感」が存在します。

しかし、「生徒」とは過剰に期待され、結果を求められる存在として扱われているようにも見えます。また、教師も、生徒や保護者や同僚から「先生」というカッコ付で語られます。カッコ付の人々が動かす組織は、成果を最大化するための効率的なシステムかもしれません。でも、半面、主体性・多様性が生まれにくい土壌のようにも思えます。そして、カッコ付の人間どうしの会話はいつまでもステレオタイプです。

本当は、「生徒」は一人の人間として、尊重され、対話をして欲しいのではないか。「生徒」「教師」というカッコを外したときに生まれる魂の出会いが、本物の教育なのではないか。そのような中で、学校が「互いにリスペクトしあい、共に成長する同志による学びのコミュニティ」として生まれ変わっていくのではないか。「教授パラダイム」から「学習パラダイム」への移行とは、授業手法の工夫改善をうんぬんするよりも、そういったことではないか、そんなことを思ったのでした。

人はみな同等に価値がある

私たちは何らかの集団に属しています。もしかしたら、人はそういった集団や組織によって「守られている」のかもしれません。しかし、集団の属性という関係性の中で生きることは必ずしも安全で正しいことではありません。もしかしたら、守ってくれていたはずの集団や組織や肩書が、自分を卑下したり、人を見下したりという負の局面を生み出す原因になるかもしれません。

人は肩書という、社会がこしらえた境界に囲まれて生きているかのように見えます。でも、そんな境界をとっぱらったとき、はじめて見えてくるものがあります。それは、人はみな同等に価値があること。そして、互いを認め、リスペクトしあう関係です。私はそこに、進歩や変革を産みだすエネルギーが潜んでいると思うのです。